

研究論文

中尾田Ⅲ類の細分

— 春日式土器から太型凹線文土器への変化の方向性 —

山中俊樹

要 旨

中尾田Ⅲ類土器にはその全体像に不明瞭な部分が多かった。しかしながら近年、木佐木原遺跡をはじめとした鹿児島県始良市域においてその出土事例が目立つ状況にあり、当該期の土器編年について、再検討を行える状況となってきた。本稿では、木佐木原遺跡発掘調査報告書での分類や始良地域での遺跡の引き算をもとに、春日式土器南宮島段階から並木式にかけての細分・変遷案提唱を行なった。

キーワード：中尾田Ⅲ類 細分と編年 縄文中期末葉

はじめに

「中尾田Ⅲ類土器」。末尾に「式」と付けられていない型式名が示すように、中尾田Ⅲ類土器（以下「中尾田Ⅲ類」とする）をとりまく九州中期後葉から末葉にかけての土器編年研究は混沌とした状況が続いている。それはその検討資料の少なさ、地域性の煩雑さによるものであり、特に春日式と並木・阿高式土器の型式転換期をつなぐとされる、中尾田Ⅲ類期においてはそれが顕著である。しかし、近年の発掘調査成果により、春日式後半段階～阿高式期にかけての資料は南部九州で大幅に増加している状況にある。

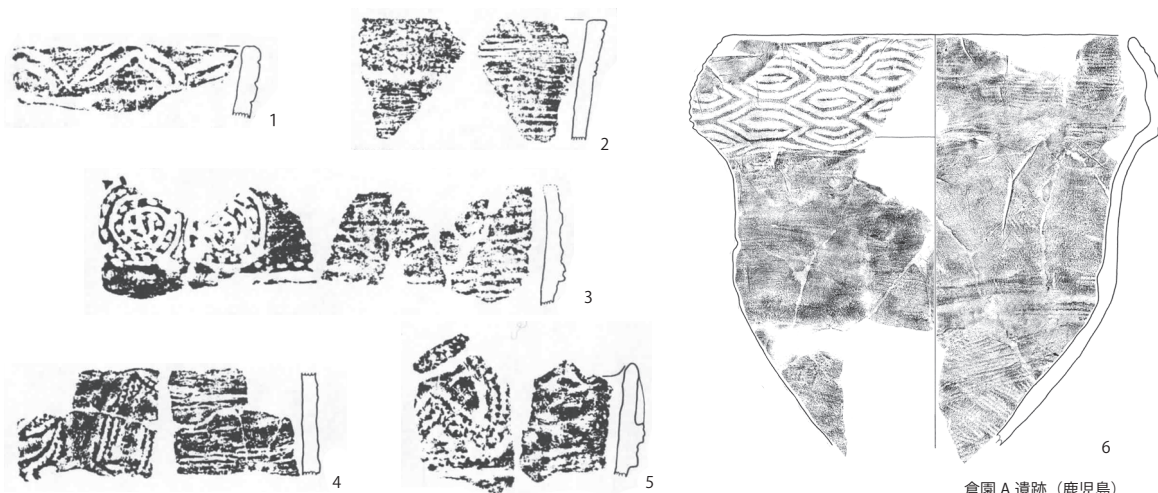
本稿では、特に近年中尾田Ⅲ類が多くに出土している鹿児島県始良市をはじめとして、中尾田Ⅲ類土器の分類を行う。また、その分類案と前後の土器型式資料との比較・検討を行うことで、中尾田Ⅲ類における変

化の方向性について、予察を行う。

1. 中尾田Ⅲ類土器を巡る研究史

(1) 中尾田Ⅲ類の設定

中尾田Ⅲ類土器は鹿児島県霧島市中尾田遺跡発掘調査報告（鹿児島県教育委員会 1981）においてアカホヤ上層出土Ⅲ類として報告されたものを指す土器型式概念であり、徳永貞紹氏（徳永 1994）によって中期末葉の土器型式として提唱された土器型式である（図 1）。これは 1990 年前後に生じた九州地方における縄文中期土器編年パラダイム¹⁾の転換の流れの中で設定されたものである。そのため、中尾田Ⅲ類は提唱当時から、太型凹線文様式の初期段階様式である、並木式土器の祖型式を意識され、設定されていた（徳永 1994、三輪 1996）。



倉園 A 遺跡（鹿児島）

図 1 中尾田遺跡出土Ⅲ類資料（1~5, S=1/6）と大平式土器（6, S=1/8）

（２）中尾田Ⅲ類の型式学的概念

中尾田Ⅲ類の型式学的概念としては、口縁部を折り返すか、粘土紐を貼り付けて肥厚させ、その部分を文様帯とするもの（眞邊 2010、26 頁）という認識で概ね統一されている。

ただ、鋸歯文を主文様とする類似性などから九州東南部を中心に分布する大平式（図 1-6）との類縁性が指摘されており、多少の混同も見受けられた。だが、眞邊氏（眞邊 2006）や徳永氏（徳永 2010）、相美氏（相美 2017）によって、その異同について詳細に論じられている。特に相美氏はその違いについて過去の研究史を概観した上で、口縁部下端の接合痕の有無や文様帯幅の違い、文様要素における突帯の有無などを挙げている。以上の観点は実見等により分別可能であるため、両者は型式学的な違いがあるとしている。

（３）中尾田Ⅲ類の編年の位置付け

前述のとおり、中尾田Ⅲ類は、並木式の祖型式として、中期末葉に設定された土器型式である。この前段階には、春日式土器南宮島段階（春日式土器の最後段階であり 4 段階目）が位置付けられている。つまり、春日式→中尾田Ⅲ類→並木式という型式的順序が想定され（東 1993、矢野 1993、徳永 1994、三輪 1996）、近年まで研究が進められてきた。

しかしながら、中尾田Ⅲ類を取り巻く前後の型式との関係については、単純な前後関係を疑問視する論もある。

例えば、富井氏（富井 2001）は並木式土器を主題とした論考で中尾田Ⅲ類土器について触れており、安直な前後関係を疑問視する立場をとっている。まず、中尾田Ⅲ類の前段階とされている春日式土器の後半段階、轟木ヶ迫段階と南宮島段階については出土状況等の観点から、時期差ではなく器形的な組成差である可能性

があることを示唆している。また、並木式土器については、佐賀県鳥栖市平原遺跡において、九州北部地域に多く見られる並木式の古相と中尾田Ⅲ類が共伴関係的に出土していることを根拠として、中尾田Ⅲ類土器が並木式土器の古相と時期を同じくして存在していたと論じている。ただ、南部九州に多く見られる並木式新相については、中尾田Ⅲ類と時期的な隔たりがあると述べている。

また、当初は並木式の祖型式土器として中尾田Ⅲ類の設定を行った徳永氏も、九州縄文研究会の要旨集において並木式土器の研究史を総括する上で、祖型式としていた中尾田Ⅲ類の型式観について触れている。富井氏や並木式古相の分布が南九州に偏るとする水ノ江氏（水ノ江 1999）の論考を踏まえ、中尾田Ⅲ類と並木式土器古相との関係については、その系譜の前後関係ではなく、共時性を認めるものであると指摘している。その上で、並木式の出自については九州北部を中心に一から探索する必要があるとした。（徳永 2010）。

また、大平式土器について詳細な分析を行った相美氏（相美 2017）も中尾田Ⅲ類土器について触れており、中尾田Ⅲ類と並木式の古相は併行関係にあったとしている。相美氏は中尾田Ⅲ類が主体的に出土する鹿児島県南さつま市所在の上焼田 A 遺跡（金峰町教育委員会 2003）を用いてその位置付けを検討しており、主体となる中尾田Ⅲ類とともに滑石を多量に含む並木式古相もわずかに出土していることから相美氏はそれを西九州からの搬入品と捉え、中尾田Ⅲ類土器と並木式土器古相が併行関係にあったとする。なお、中尾田Ⅲ類と春日式土器との関係については前後関係であるとしている（図 2）。

以上のように、中尾田Ⅲ類の編年上の位置付けについては、設定当初は春日式土器と並木式土器のヒアタスを埋めるものと考えられていたが、昨今の資料増加

南西諸島	南九州東半域	南九州西半域	西九州	中九州	北部九州	東九州	瀬戸内地域
室川下層式	春日式 北手牧・前谷タイプ		船元Ⅲ式				
	春日式 前谷タイプ						船元Ⅳ式
面縄前庭式	大平式 古段階	春日式 轟木ヶ迫段階		(+)	春日式 轟木ヶ迫段階		
		春日式 南宮島段階		(+)	春日式 南宮島段階		
	大平式 中段階	中尾田Ⅲ類		(+)	中尾田Ⅲ類		矢部奥田式 古段階
				並木式 古段階			
				並木式 新段階			
	大平式新段階						矢部奥田式 新段階
	宮之迫式		阿高式				

※瀬戸内地域は矢野氏の編年観に拠った

図 2 相美氏（2017）の編年試案

やそれに伴う議論の深化により、春日式後半段階や並木式と前後関係もしくは共時的である可能性も示唆されるようになってきたのが現状である。

(4) 中尾田Ⅲ類の分類・細分案

春日式から並木式にどのようにして変容したのか、つまり並木式がどのようにして成立したのかを探るためには、その祖型式もしくは古段階に関係の近いとされる中尾田Ⅲ類の分析が重要になってくる。これまでにどのような分類・編年案が提示されたのか、少し振り返ってみたい。

中尾田Ⅲ類の分類は、三輪氏による凹線文土器から縁帯文土器にかけての系統の流れを検討した論文において示された(三輪 1996)のが初出である。そこで三輪氏は、中尾田Ⅲ類を以下の3つに分類した。

①屈曲・肥厚する口縁部に二枚貝施文を施す土器(中尾田Ⅲ a-1 類)(図 1-1・2)、②口縁部に沈線文・押引文を施す土器(中尾田Ⅲ a-2 類、Ⅲ a-3 類)(図 1-3・4)、③口縁部に突帯を貼付文様的に描き、その上に二枚貝刺突文を施す土器(Ⅲ b 類)(図 1-5)、以上3形態である。そして、①が阿高式土器の交互凹点文、②が大平式土器に、③が並木式土器にそれぞれつながるとしている。うち、②については大平式土器そのものであり、また①の中でも、口縁部肥厚帯下端に凹点文を施すものは、凹点文のないものよりも新出の土器であると位置づけている。

他に、眞邊氏も中尾田Ⅲ類の分類を行っている(眞邊 2006・2010)。氏は中尾田Ⅲ類を施文具の違いから分類しており、施文具には篋状工具と貝殻による2通りの施文がみられると指摘している(眞邊 2006)。また、その後発表した論考においては、文様の形態から①二枚貝刺突によって並行線文や鋸歯文を描くもの、②篋状工具によって連続刺突文・渦文や鋸歯文・曲線文などの沈線文を描くもの、③口唇部にさらに粘土紐を鋸歯状に貼り付けるもの、の3タイプに分類しているが、これらの分類をもとにした春日式から並木式までの変遷観については言及していない。

そのような中、近年発掘調査がなされた鹿児島県始良市木佐木原遺跡の報告書において中尾田Ⅲ類の分類が行われている。それについては、後で詳述する。

(5) 中尾田Ⅲ類の分布について

中尾田Ⅲ類土器は、南九州を中心とした分布が認められ、中でも鹿児島県域西半に出土分布が集中している(図 3)。宮崎平野、日南海岸沿岸、志布志湾周辺

ではその出土がほとんど見られず、都城盆地においてもその出土量は「客体的」と評価される。

また、佐賀県・長崎県などの九州北部においても若干量の出土が確認できるが、散発的なものにとどまっており、南九州よりも量比は圧倒的に少ない状態にある。さらに現在の熊本県にあたる中九州では、球磨川支流の川辺川流域を除いてほとんど見られない状況である。中尾田Ⅲ類は以上のように九州内において分布の勾配が見られる状況にあるのが現状である。また、宮崎県の日向灘を中心とした東南九州では大平式が、西南九州に多く出土する春日式、中尾田Ⅲ類、並木式と併行する形で一時期をなしていたという見方が近年定着している(図 2)(相美 2017)。

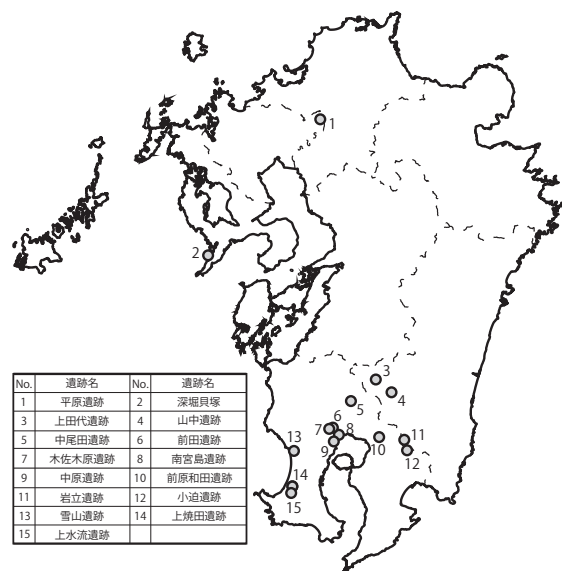


図 3 中尾田Ⅲ類土器の出土遺跡分布図

(6) 中尾田Ⅲ類土器研究をとりまく問題点

以上、中尾田Ⅲ類に関わる研究史についてまとめたが、中尾田Ⅲ類の分析については低調な状況が続いており、それ故に各一群の位置付けが不安定な状況である。

これを解決するには、近年出土資料が増加している中尾田Ⅲ類の分類を主とした属性分析を行うこと、つまり中尾田Ⅲ類の再検討が有用である。中でも、鹿児島県始良市所在木佐木原遺跡では、春日式の後半段階～並木式が連続するように確認でき、大平式土器もまとも出土している。また、研究史でも述べた通り、木佐木原遺跡の報告書総括において、分類案とその変遷観が提示されている。本論では、その分類案の検証を行うことで、当該期における編年観の糸口を見出すことを目的とする。

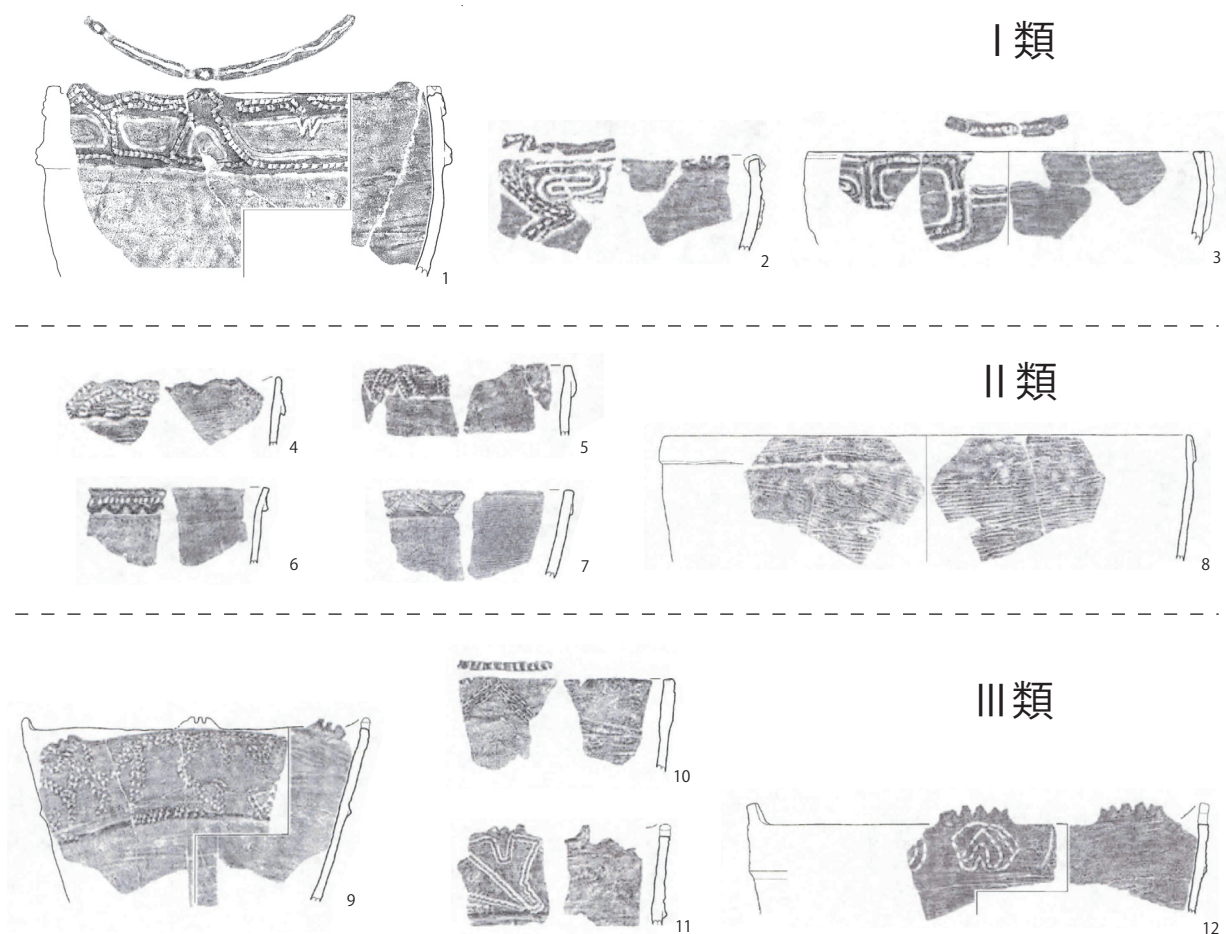


図4 木佐木原遺跡出土中尾田Ⅲ類の分類

2. 木佐木原遺跡について

木佐木原遺跡は鹿児島県始良市蒲生町に所在する遺跡であり、県道改築に伴って2015年から2016年にかけて本発掘調査が実施された。

本発掘調査では、縄文時代中期後葉から古代までと、中世、近世の遺物・遺構が検出されている。その中でも、特に縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての遺物が多量に出土しており、注目される。

当該期における遺構は検出されていないが、中尾田Ⅲ類をはじめとして、春日式後半段階から阿高式土器にかけての相当数の土器が見られることから、当遺跡における当時の文化的な密度は相当なものであったと考えることができる。

当遺跡から出土した中尾田Ⅲ類には、春日式土器の後半段階に程近いもの、また並木式や阿高式・大平式土器と親類性が高いと考えられる土器が見られる。これらは春日式の後半段階から並木式や大平式への変化の方向性を見出すことができる資料であり、当遺跡における中尾田Ⅲ類の分類を通して、春日式と並木式のヒアタスを説明できる可能性を秘めている。

加えて、木佐木原遺跡の発掘調査報告書では、口縁部の形態から中尾田Ⅲ類が3類に分類されており、その分類に基づいた変遷観についての言及がなされている。

本稿では木佐木原遺跡報告書のその中尾田Ⅲ類の分類案とその変遷観について、他の始良市・霧島市域における出土状況と比較することで、各分類の時期的単独性が担保されるかについて検証していく。

以上をもって、春日式後半段階から並木式・大平式期における変化の方向性について見出すことが本論の目的である。

なお、今回分類の対象とする資料は、口縁部に肥厚帯を持つ、木佐木原遺跡報告書における3類土器(=中尾田Ⅲ類)とする。

3. 木佐木原遺跡における中尾田Ⅲ類の分類

まず、木佐木原遺跡発掘調査報告書では、口縁部文様帯の形態から中尾田Ⅲ類が以下の3つに分類されている。(図4)

Ⅰ類：刻み目隆帯を貼り付けるタイプ(1-3)

- 2 類：口縁部文様帯（肥厚部）の幅が狭いタイプ（4-8）
 3 類：口縁部文様帯（肥厚部）の幅が広いタイプ（9-12）

報告書の総括ではこのうち 2 類・3 類について、2 類→3 類と言った変遷を辿れる可能性があるとしているが、それを形式的な時期差と見るかについては今後の課題としている。また、1 類については、以前東氏（東 1994）によって紹介されていた協和式土器に類するものであると言及している。

木佐木原遺跡報告書で主張される 2 類→3 類という方向性は、前型式である春日式土器南宮島段階と後継型式と考えられる並木式新段階とを比較しても齟齬がないと考えられ、首肯できる（図 5）。さらには、3 類土器には、並木式土器と折衷関係にあるようなもの（図 7-18）も見られることから、3 類が並木式と近いものであると考えることは必然的であろう。

ただ、報告書でも述べられている通り、各分類が時期差を示すものなのか、また時期差だとしても 1 類がどの時期に属するものか、検証を行う必要がある。それについては以下において周辺遺跡における出土状況から検討したい。

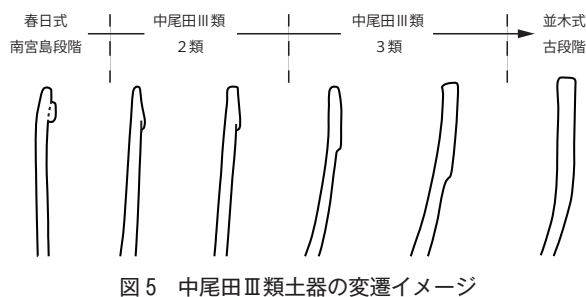


図 5 中尾田Ⅲ類土器の変遷イメージ

4. 始良市周辺域における中尾田Ⅲ類細分案の検証

土器の各分類においてその時期差を見出そうとする時、所謂「遺跡の引き算」を行うことが有効である。例えば、A 遺跡において出土していない土器 X が近隣の B 遺跡においてまとまった数量確認される場合、A 遺跡で使われていなかった土器 X が B 遺跡では使用されていたこととなり、土器 X は A 遺跡の土器と時期の差が見られると言うことになる。また、土器の地域差をあまり考慮しなくても良い近隣の遺跡どうしでこの作業を行うことにより、時期差の蓋然性は高まる。以下では、この作業を念頭において、各分類が時期差であるかどうか、特定の小地域の遺跡間で検討していきたい。

分析対象とするのは、始良市内の 4 遺跡と、霧島市所在の中尾田遺跡を含めた計 5 遺跡である（便宜的に

「始良地域」と呼称する）。木佐木原遺跡が所在する始良市では近年、前田遺跡をはじめとして縄文時代中期後葉における発掘調査事例が近年増加傾向にあり、中尾田Ⅲ類も一定数のまとまった量が確認されてきている状況にある。また隣接自治体である霧島市に所在する中尾田遺跡は他の比較対象遺跡である 4 遺跡と遠く離れておらず、中尾田Ⅲ類もまとまって出土している。以上の遺跡を対象として、遺跡の引き算を行いたい。

各遺跡における中尾田Ⅲ類の前後型式の出土状況を概観する（表 1）。

木佐木原遺跡では、前後型式である春日式の南宮島段階と並木式土器双方が出土しており、両型式がまとまって出土しているのが特徴である。このような状況にあるのは木佐木原遺跡のみである。また、中尾田遺跡においては、春日式土器南宮島段階の出土が認められないもの、並木式土器が多く出土している状況にある。逆に、前田遺跡、中原遺跡、南宮島遺跡の 3 遺跡では、春日式土器南宮島段階が多く出土しているものの、並木式土器は少量の出土にとどまる状況が見られる。

表 1 始良地域の各遺跡における中尾田Ⅲ類出土状況

	前田遺跡	南宮島遺跡	中原遺跡	木佐木原遺跡	中尾田遺跡
春日式土器 南宮島段階	31	29	31	74	0
中尾田Ⅲ類 1類	15	6	42	101	27
中尾田Ⅲ類 2類	0	0	0	89	27
中尾田Ⅲ類 3類	0	0	0	9	1
並木式土器	1	0	1	51	35
大平式土器	0	0	1	32	4
合計	47	35	75	356	94

この状況を踏まえて、中尾田Ⅲ類各類の遺跡での出土量を見ると、春日式土器・並木式土器の双方がまとまって出土する木佐木原遺跡、春日式のない中尾田遺跡は 2 類・3 類とも同数程度の出土量がある。逆に並木式土器がなく、春日式土器が一定量見られる前田遺跡、中原遺跡、南宮島遺跡の 3 遺跡からは、中尾田Ⅲ類の 3 類がほとんど出土していないことがわかる。前型式である春日式南宮島段階が一定量出土しており、中尾田Ⅲ類の 2 類も一定量の出土がみられるという状況は、春日式南宮島段階と 2 類の類縁性が高いことが遺跡の出土状況からも補強されたということである。また、後継型式の並木式が出土する遺跡でしか中尾田

Ⅲ類の3類が出土していないことも、3類と並木式の類縁性を担保するものである。

加えて、1類土器も、3類土器と並木式土器の双方が出土する中尾田遺跡と木佐木原遺跡でしか見られない。これは、1類土器が3類土器と時期的に近く、2類土器とは時期的に離れている可能性を示唆するものであろう。

以上の結果から次が結論として導き出される。

始良地域を対象とした小地域内の遺跡の引き算により、中尾田Ⅲ類の2類と3類には、それぞれに時間的な差異が存在すること。

2類が春日式土器に近く、3類が並木式に近い型式であるという時間的な変遷が裏付けられたこと。

最後に、1類は新段階である3類と時期を共にする可能性も高いこと、この3点である。

ただ、1類の分析における総数が少ないため、この分析では断定が難しい。これについては、他地域での分析結果も含めて判断する必要があるため、今後の課題としたい。

5. 春日式土器から並木式への変化の方向性

以上より、春日式土器から並木式土器における土器型式変化の方向性について言及したい。

春日式後半段階から阿高1式・並木式においては、春日式南宮島段階→中尾田Ⅲ類古段階（前章検討の2類）→中尾田Ⅲ類新段階（前章検討の3類・1類）→並木式土器といった変遷を辿る（図7）。この中で、春日式南宮島段階と中尾田Ⅲ類古段階については、中尾田3類古段階が多く見られる中尾田遺跡で春日式土器がみられことから、双方が時期差を持つ可能性が高い。

ただ、中尾田Ⅲ類新段階と並木式土器との前後関係

については昨今議論となっているが、双方の単独性や共時性を本論で検証することは難しい。単独性を遺跡の引き算からは見出せなかったからである。

一方、中尾田Ⅲ類古段階と、並木式古段階については、時期差を持つ可能性が高いと考えられる。前章の前田・中原・南宮島遺跡での分析結果と、並木式土器が検出されない上水流遺跡（鹿児島県埋蔵文化財センター）の大型集石遺構5号において、中尾田Ⅲ類古段階のみが出土する状況（図6）から裏付けられる。

また昨今、相美氏（相美2017）の研究から、大平式土器の開始が東九州では春日式後半段階まで遡らせる編年案が提唱されており、これについても各地の出土状況をもって吟味を重ねながら確認を進めていくことが必要である。しかし、これについては当地域における遺跡間の出土状況から検証することが難しい。ただ、今回対象とした遺跡からは相美氏が古段階に置くような、口縁部が強く「く」の字状に屈曲するような土器は見られない。このことから、少なくとも当地域においては、相美氏が大平式土器の古段階に比定する土器は当地域において用いられていなかった可能性が指摘できる。今後の発掘成果による変更も否定できないが、現状少なくとも当地では春日式後半段階において、春日式が単独で存在していたことを指摘できそうである。

上記を鑑みると、始良地域を中心とする九州西南部においては、春日式土器から並木式土器が一連の流れの中で、中尾田Ⅲ類を挟みながらおよそ一系統的に変化していったと理解できる。その変化の様相を模式的に表した図が図8である。

口縁部文様帯の幅や、器形は漸次的に変化していく中で、口縁部突起や調整・口唇部の断面形状などについては、中尾田Ⅲ類の古段階と新段階の間で一つの画



図6 上水流遺跡出土の中尾田Ⅲ類古段階資料（S=1/6）

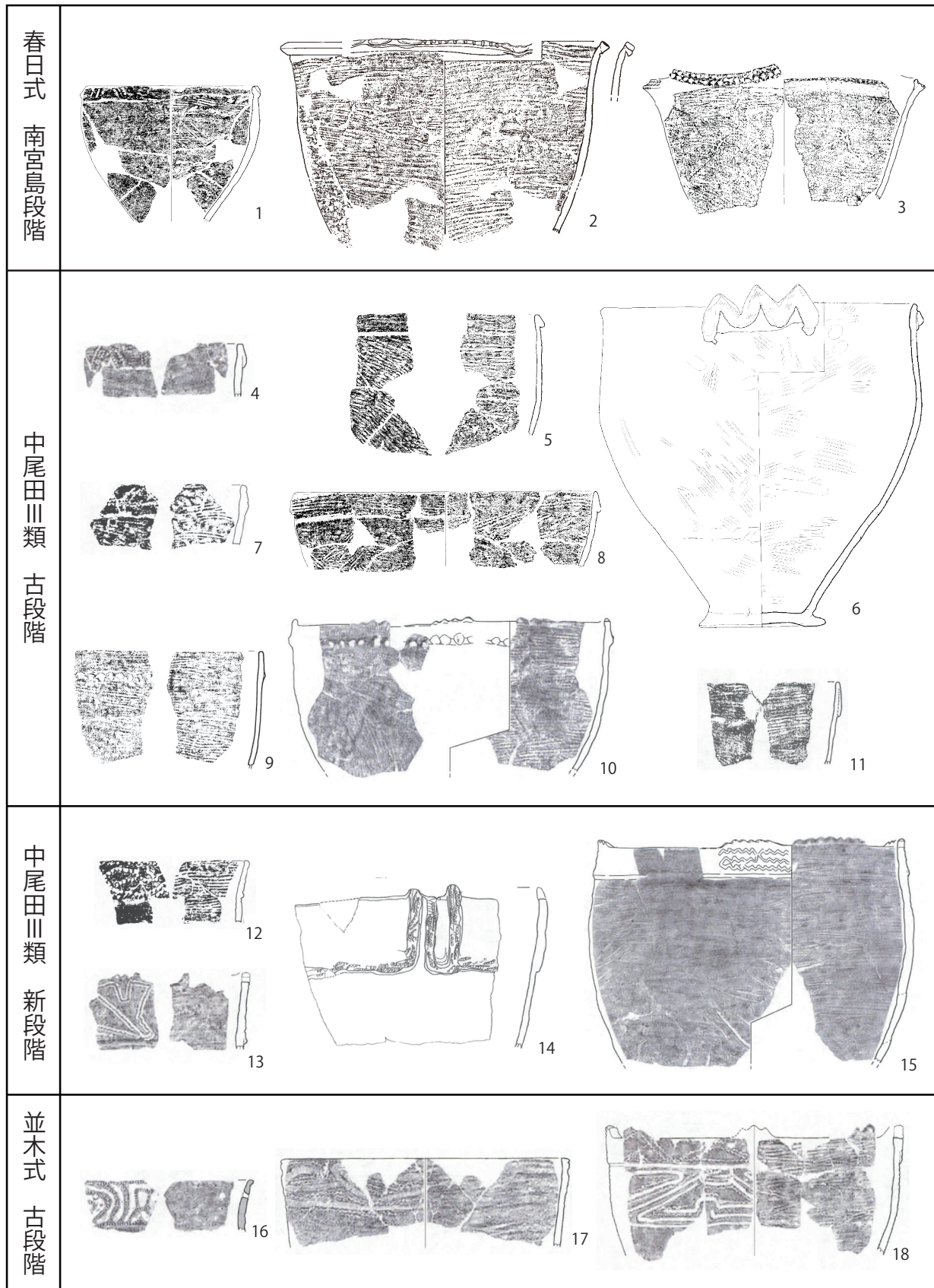


図 7 春日式南宮島段階から並木式までの土器変遷図 (S=1/6)

1・5・6・8：上水流遺跡、2：小迫遺跡、3：天神河内第1遺跡、4・13・16・17・18：木佐木原遺跡、
7・12：中尾田遺跡、9：中原遺跡、10・15：山中遺跡、11・14：上田代遺跡

期が現れる。中尾田Ⅲ類の新段階において、並木式土器に近い特徴が各属性に現出するのである。中尾田Ⅲ類の新段階の資料に凹線の施される資料は多くないものの、各属性の特徴から、並木式土器～後期阿高系土器まで連綿と展開される太型凹線文様式の発生に大きく関わった勃興期の土器と位置付けられよう。

おわりに

以上、中尾田Ⅲ類の変化の方向性について、周辺の土器型式との関係を意識しながら一定の考察を行った。

今回行った分析はあくまでも始良市域周辺という1地域から出土した土器の出土状況の検証を行ったのみにとどまる。そのため、今後は周辺型式である大平式土器や並木式土器との出土状況を絡めながら、つぶさに見ていかなければならない。

また、中尾田Ⅲ類新段階としたものの中には、阿高式土器の2式以降と酷似した文様を持つ土器も含まれている。このような資料については、阿高式に近い年代を示す可能性が高いが、本論では詳細な分析ができなかった。こちら今後の課題とする。

謝辞

本論を執筆するにあたり、資料調査にあたり、鹿児島埋蔵文化財センターの東和幸さま・関昭恵様には大変お世話になりました。謹んで御礼申し上げます。

また、矢野先生、ご退官おめでとうございます。学生時代から先生には大変お世話になりました。先生が

いなければ、南九州で縄文土器を定点とした、心ときめく日々を送ることも想像が付きませんでした。大変感謝申し上げます。退官された後も、引き続きの益々のご発展をお祈りしております。

注

- 1) 1980年中ばまでは、春日式が縄文前期、並木式土器が縄文中期前葉、阿高式が縄文時代中期中葉～後葉に比定されていた。しかし、春日式土器と瀬戸内地方を在地とする里木Ⅱ式土器との共伴関係が見出された前谷遺跡での発掘調査を代表とする1980年代中ばからの調査事例によって、春日式土器が縄文時代中期後葉におかれるようになり(東1989)、それにともなって並木式など他の土器群の時期設定変更を迫られた中期土器研究史上の転換期。

参考文献

- 始良市教育委員会 2023『前田遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 始良町教育委員会 1977『南宮島遺跡』
- 鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 鹿児島県教育委員会 2003『中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(54)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2020『木佐木原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書

属性	春日式			中尾田Ⅲ類		並木式・大平式		阿高式
	前谷段階	轟木ヶ迫段階	南宮島段階	古段階	新段階	古段階	新段階	I式
器形・文様帯構成								
口唇部突起	貼付突帯				撫で付け			
調整	貝殻条痕							
			ナデ					
口唇部の断面形状								
滑石の混入率								

図8 春日式土器～阿高式の各属性の変容模式図

(203)

- 相美伊久雄 2017「大平式土器再考 ― 東南部からみた九州縄文中期後半期の様相 ―」『鹿児島考古』第 47 号 鹿児島県考古学会
- 土岐耕司 2016「春日式土器の分類・変遷と長崎市深堀遺跡出土資料の検討」『西海考古』第 6 号 西海考古同人会
- 徳永貞紹 1994「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
- 徳永貞紹 2010「並木式土器研究の現在地」『九州縄文時代中期土器を考える 発表要旨・資料集』第 20 回九州縄文研究会佐賀大会 九州縄文研究会
- 富井眞 2001「西日本縄文土器としての並木式土器の評価 ― 阿高式・中津式との関係 ―」『古文化談叢』第 47 号 九州古文化研究会
- 東和幸 1989「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第 23 号 鹿児島県考古学会
- 東和幸 1991「鹿児島県における縄文時代中期の様相」『南九州縄文通信』No.5 南九州縄文研究会
- 東和幸 1994「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会

- 東和幸 1999「九州地方 中期（春日式）」『縄文時代』第 10 号（第 2 分冊）縄文時代文化研究会
- 眞邊彩 2006「縄文時代中期土器研究の現状 ― 研究史と中尾田Ⅲ類土器・大平式土器の整理 ―」『鹿児島考古』第 40 号 鹿児島県考古学会
- 眞邊彩 2010「九州南部における中期土器の現状と課題 ― 中期後葉～中期末の様相 ―」『九州縄文時代中期土器を考える 発表要旨・資料集』第 20 回九州縄文研究会佐賀大会 九州縄文研究会
- 水ノ江和同 1999「九州地方 中期」『縄文時代』第 10 号（第 2 分冊）縄文時代文化研究会
- 三輪晃三 1996「九州阿高式系・縁帯文系土器群の研究 ― 縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景 ―」『奈良大学大学院研究年報』1 奈良大学大学院
- 矢野健一 1993「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚 I』愛媛大学法文学部考古学研究報告第 2 冊 愛媛大学法文学部考古学研究室
- 矢野健一 1994「北白川 C 式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第 16 集 古代吉備研究会

